View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

2013年
6月14日
金曜日

副次的影響（意図せざる結果）

岡田　敏裕　准教授（マクロ経済学）

経済学は非常に理屈っぽい学問です。経済学を学ぶ上で特に重要なのは、企業、政府、経済の現状や仕組みを知る（覚える）ことではなく、人間の行動の結果として生じる様々な事象を論理的に分析することです。したがって、物理などのいわゆる理系科目と同様に、分析対象が物（思考しない物体）から人（思考する物体）へ変わっただけで、数学との親和性が高いのが経済学の特徴です。経済学の本場である欧米では、「経済学は非常に数学的で理論的な学問である」と広く一般に認識されています。

では、このような理屈っぽい学問である経済学を学生の皆さんが**真剣**に学ぶことで獲得できる能力の中で、特に有用なものはなんでしょう。経済学は人間の行動を理屈っぽく分析する学問ですので、人間行動の「意図せざる結果」、別の言い方をすると「副次的作用」を見通す力を身につけることできるということが、大多数の学生にとっての経済学を学ぶことの一番の便益でしょう。「副次的」あるいは「意図せざる」と言うと、たいしたことがないように思われるかもしれませんが、その影響は一時的影響（直ぐ見通せる影響）と比較してより重要となるケースが非常に多くあります。

例えば、多くの皆さんが一年生のときに読んだと思うマンキュー入門経済学で紹介されている米国においてシートベルト義務化が行われた時の話があります。シートベルトの義務化により慎重な運転の便益が低下し運転者のインセンティブを変え、スピードを出したりするなどの軽率な運転が増加して交通事故数が増加（意図せざる結果）してしまったという話です。経済学を学習したことがある人は、人間のインセンティブの変化による副次的影響（意図せざる結果）を十分に考慮するようになります。皆さんが社会に出て働くようになったときに最も能力の差が顕著にでることの一つが、この副次的影響を見通せる能力です。直ぐ分かる（直感的に分かる）ことは当然多くの人が認識できることなので、この点では大きな差が出てこないからです。

以上のことをより広い観点で言い換えると、次のようなことが言えるのだと思います。学生の皆さんが経済学を**真剣**に学ぶことによって獲得する一番重要な利得とは、「何を考えるべきか」あるいは「何が重要なのか」ということを知ることができることではなく、「人間が関わる事象を分析する場合には、どのように事象を考えるべきか」ということを学び、その方法を効果的に身につけることができることです。もう少し具体的な形で表現すると、**真剣**に経済学を学ぶことの利得は、就職活動に有利、例えば、金融や商社などの給料が比較的良い業種へ就職しやすくなるなどという多くの学生が思っている（感じている）一次的な影響（利得）ではなく（この影響はほとんどないと思いますが）、むしろ、就職後に生じる事柄、例えば、任せられた仕事で大きな成果をあげる、リストラされないなどの副次的な影響（利得）のほうが大きいのです。■